

自由と卓越の隘路：リベラル卓越主義の検討

米村幸太郎

目次

第1節：イントロダクション

第2節：客観的福利論とリスト化戦略の困難

第3節：ラズの形式化戦略

第4節：形式化戦略の問題

第5節：結語

第1節：イントロダクション

本稿はいわゆるリベラル卓越主義 (liberal perfectionism) について、その理論構造を明らかにした上で、それが抱える問題点について検討を試みることを目的とする¹⁾。論者によって若干のヴァリエーションがあるものの、その中核的コミットメントは、次の3つの主張に要約できるだろう。

1) リベラル卓越主義に分類される論者としては、まずはジョセフ・ラズが挙げられる (Raz 1986 (以下 MF と略記する) 1989, 1994, 1996, 2000) が、その他にも主要な論者としてステイブ・ウォール (Wall 1998, 2010, 2012)、ジョージ・シャー (Sher 1997)、アレクサンドラ・コート (Couto 2014)、ジョセフ・チャン (Chan 2000) らを挙げることができる。

第1に、リベラル卓越主義者は、良い生き方とは何か、何が価値ある人間の生を構成するか、およびそれらの問いに関連した形而上学的前提についての一定の論争的な（controversial）構想を支持する。そして、リベラリズムはそうした良き生についての論争的構想に基づかなければならないと彼らは考える。この点で、リベラル卓越主義は、後期ロールズを筆頭とする政治的リベラリズム（political liberalism）と根本的に対立する。ジョナサン・クォンの用語を借りて、これを包括的構想（comprehensive conception）へのコミットメントと呼んでおこう²⁾。

第2に、リベラル卓越主義は理論的基盤のレベルで良き生についての論争的な立場に立脚すべきことを主張するだけでなく、実践的含意のレベルにおいても諸個人の良き生への積極的関与を主張する。すなわち、国家が人々の一定の活動を、それらが有する内在的価値／無価値を理由に促進したり（promote）阻害する（discourage）ような卓越主義的諸施策が、少なくとも道徳的に許容される場合があると彼らは考える³⁾。彼らによれば「いくつかの文脈において、政治的権威は積極的にある種の生き方を他のものよりも優遇すべき⁴⁾」なのだ。これを、卓越へのコミットメントと呼んでおこう。

2) Cf. Quong 2010, p. 12.

3) 「少なくとも」という限定を付したのは、コートが指摘するように、良き生の促進／悪しき生の予防という卓越主義的目標が単に許容されるのみならず、国家はそれを行うべきであるとか義務があると主張するタイプのリベラル卓越主義も考えられるからである（Couto 2014: 3-9）。コートは前者をソフトなリベラル卓越主義、後者をハードなリベラル卓越主義と呼んで区別しているが、後者はより強い主張であり、より強い正当化を必要とする。リベラル卓越主義を退けるという本書の課題からすれば、前者の理論的欠陥が示されれば十分であるだろう。ゆえにソフトなヴァージョンのみを、ここでは検討したい。

また、「内在的価値／反価値を理由に」という条件も重要である。たとえば卓越主義者でなくとも、社会的安定性の維持という目的から、一定の生き方の促進を正当化することとは考えられるからである。（Lister 2014: 20）。

4) Cf. Wall 1998, p. 207.

この第1と第2のコミットメントは、論理的には独立であることに注意しよう。政治的構想を棄却し包括的構想に立脚しつつ、卓越主義的施策の許容可能性を否定することも可能である⁵⁾、政治的構想に立脚しつつ卓越主義的施策にコミットする政治的卓越主義（political perfectionism）とでも呼ぶべき立場も論理的には可能である⁶⁾。

ともあれ、このようにリベラル卓越主義は卓越へのコミットメントを標榜する。しかし同時に、リベラル卓越主義は自らがあくまでリベラルな政治構想であることを主張する。この点、彼らは2つのポイントを強調する。第1に、卓越主義的施策が正当化される場合でも、それらは補助金や課税、名誉の付与や教育といった、非強制的で間接的な手段によって追求されなければならない⁷⁾。第2に、リベラル卓越主義が促進しようとしているのは、主として自律のようなリベラルな善（liberal goods）である。結果、卓越主義的施策が実際に許容されるのは限られた場合であり、それ以外の場合においては、概ね個人の自由な選択の領域が確保されるとする。これを自由へのコミットメントと呼んでおこう。

5) たとえばドゥオーキンやキムリッカがこの立場に該当するだろう（Quong 2010: 19）。

6) クォンはこのような立場を明示的に採用している論者はいないだろうとしている（Quong 2010: 20-21）。だが、このような意味での政治的卓越主義者に分類できる論者は存在する。たとえばヌスバウム（Martha Nussbaum）の議論は、このような政治的卓越主義として理解する余地がある（Couto 2014: 60-63）。ヌスバウムは、人間の潜在能力の中身を重なり合う合意の対象としているからである。またチャンの善についての「局所的合意（local agreement）」の可能性に訴える議論や、マン（Franz Fan-lun Mang）の「良き生に関する限定的判断（qualified judgement）」に依拠した議論も、このような理路からリベラリズムと卓越主義を接合しようとしている筋道だと整理できる。

7) ただし、この点をすべてのリベラル卓越主義者が貫徹しているかは疑問である。たとえばラズは、卓越主義的政策の追求は「主として（primary）」間接的手段によって行われなければならないとしており、強制的卓越主義的施策の余地を残しているようにも思われる。

まとめると、良き生（と関連する形而上学的教説）についての論争的な見解に立脚しつつ、一定の卓越主義的实践の許容可能性と自由との両立可能性を描き出そうとするのが、リベラル卓越主義の理論目標であると言える。現在、この立場を擁護する論者はけして多いとは言えないかもしれない⁸⁾。だが彼らが掲げる理論目標と実践的含意が興味深いものであることには変わりはない。このような問題関心を背景に、以下、リベラル卓越主義の成否を検討していきたい。その際、リベラル卓越主義の中核的な理論的基礎である良き生についての見解を巡って、論者の見解を2つの下位類型に区分しておくことが検討のために有益である。第2節では、まず2つの類型が共通にコミットする客観的福利理論の諸特徴を整理した上で（第2節（1））、1つ目の類型であるリスト化戦略が大きな難点を抱えていることを確認する（第2節（2））。続けて、リスト化戦略の困難を乗り越えるべく企図された2つ目の類型として、リベラル卓越主義の指導的論客であるとされてきたジョセフ・ラズの形式化戦略と、その含意を詳しく見ていく（第3節）。だが、こうした形式化戦略も新たな問題を抱え込むことになる旨と指摘し（第4節）、リベラル卓越主義の試みが全体として断念されるべきであることを主張して稿を閉じる（第5節）。

第2節：客観的福利論とリスト化戦略の困難

（1）客観的価値と福利の客観説

リベラル卓越主義は包括的構想として自らを定位する、すなわち何が個人の良き生を構成するのかについての、一定の論争的な見解の正しさに依拠するのであった。残り2つのコミットメントの具体的内実と成否も、この第1の点に

8) マンは、リベラル卓越主義者として活動的なのは、現在ではウォールくらいであると指摘している（Mang 2013）。

ついていかなる見解を採用するかに大きく依存する⁹⁾。よって、第1のコミットメントの内実、すなわちリベラル卓越主義が採用する良き生ないし福利についての理論から話を始めたい。すでに述べたように、本稿はこの点についてリベラル卓越主義が採用する見解を2つの類型に区分して検討する。だが、個別の類型について検討する前に、それらが支持する共通の福利論上の諸前提を確認しておこう。

第1に、リベラル卓越主義は福利の客観説 (objective theory of well-being) に与する¹⁰⁾。すなわち、私がそれに対してどのような主観的態度を抱いているかにかかわらず、ある種の活動や事態は客観的かつそれ自体として価値を有する、ないしは反価値 (disvalue) を有し (以下、単に客観的価値と呼んでおこう)、それらは私の福利を向上させると主張するのである。私の生が私自身にとって良いものになるためには、単に自分の欲求が充足されるとか単に快樂を覚えているというのではなく、私が生において従事する活動や達成する状態がそのような客観的価値を有していることが必要なのだ。これが福利の客観説の要諦である。このように考えるのでなければ、卓越主義的施策の余地はそもそも存在しないだろう。ゆえにリベラル卓越主義は福利の客観説を採らなければならない。

こうした福利の客観説を採るからといって、すべての人が目指すべき唯一の生き方があると考える必要はない。多様な活動や状態が客観的価値を有することを客観説は認めうるからである。だがそうだとすると、そもそもそれらの多様な客観的価値が主体の心的態度とは全く無関係に福利を向上させるというのは疑わしい。この発想に従えば、たとえばわたしが親密な人間関係に対して全く価値を置いていないにもかかわらず、卓越主義者は私に親密な人間関係を強いることでわたしの福利を向上させられることになる。これは不合理であるだろう。

9) Cf. Couto 2014, p. 22, p. 39, Raz 1989, p. 1230, Wall 2012.

10) Cf. Couto 2014, pp. 24-5.

こうした懸念から、リベラル卓越主義はいわゆる是認条件（endorsement condition）を採用する。ある活動や状態の有する客観的価値が主体の福利を向上させるためには、加えて、それらの価値に対する主体自身の一定の肯定的態度、すなわち是認（endorsement）が存在していなければならないとするのである。たとえば、親密な人間関係は客観的価値を持つでしょう。だが、親密な人間関係が私の福利を向上させるためには、私がそれを是認している必要がある—このようにリベラル卓越主義者は主張することになる¹¹⁾。

リベラル卓越主義者は、良き生を構成する内在的価値が複数存在するだけでなく、それらの内在的価値の多元性にコミットする（価値多元主義¹²⁾）。内在的諸価値は比較不可能で通約不可能である。2つの価値のうち、どちらかがより価値があるとも、等しいとも—理性によっては—言うことができない。したがって、そうした異なる諸価値によって構成される異なった生が有する福利もまた、比較不可能で通約不可能である。尼僧として歩む人生と、母として歩む人生は異なった、しかしどちらも共に内在的諸価値を体現するのであり、どちらかが当人にとってより良い人生であるとも、等しく良い人生だとも言えないのだ。ゆえに、実践理性のみによって、どちらかを選択すべきであると判断することはできず、そこには一種の実存的決断が介在せざるを得ないことになる。

このような価値多元主義は、リベラル卓越主義にとっていくつかの重要な含

11) Cf. Couto 2014, pp. 50-54, MF, p.194, p.294, *et. passim*.

クォンは「卓越主義者を反卓越主義者から区分する鍵になる特徴とは、本性的かつ内在的な価値がわたしたちの政治的推論に入り込むことが許容されるという主張にある」のだと指摘し是認条件を卓越主義にとっての必然的要請とみなす必要はないとしている（Quong 2010: 28-9）。卓越主義一般について言えば、クォンの性格付けは妥当であるだろう。だがここでは卓越主義の下位変種としてのリベラル卓越主義について論じているのであり、リベラル卓越主義者たちが是認条件を受け入れている以上、これをリベラル卓越主義の必要条件とみなすことは許されるだろう。

12) Cf. Wall 2010, MF, ch. 13.

意を持つ。第1に、主体が抱く異なった生の構想は互いに比較・通約不可能であるだけでなく、両立不可能である場合がある。尼僧としての生き方が潜在的に持つ諸価値を十全に体现しつつ、同時に母としての生き方が潜在的に持つ諸価値を十全に体现することは両立できない。ラズの言うように、「ある諸価値に対応した最高に良い人生（maximally good life）は、他の諸価値に対応した最高に良い人生と対抗関係に立たざるを得ない¹³⁾」のである。

第2に、価値多元主義は不寛容の発生論的説明を提供する。異なる比較不可能な内在的諸価値を是認する諸個人は、必然的ではないにせよ、互いの生き方を簡単には承認し得ない傾向にある。ある内在的価値の是認は、それと比較不可能な他の諸価値についての無理解や批判をしばしば伴うからだ。よって価値多元主義の下で生きる諸個人の間には、お互いの生き方に対する不寛容が生じるのだとされる¹⁴⁾。

(2) リスト化戦略とその困難

ここまでリベラル卓越主義が共通にコミットする客観的福利論の諸前提について確認してきたが、そもそも何がそうした客観的価値を有し、したがって主体の福利を向上させるのだろうか。こうした客観的価値の具体的内容の提示は、リベラル卓越主義の理論的全体像を描出するにあたって当然必要になるモジュールであるように思われる。またそれだけでなく、リベラル卓越主義の含意の解明にとっても必要であるように思われる。というのも、リベラル卓越主義がいかなる規範的主張を行うかは、具体的に何が客観的価値を有するのかが分からなければ未解明のままに残されるように思われるからである。

ここで多くのリベラル卓越主義者はこの疑問にストレートな答えを与えよう

13) Cf. MF, p.398.

14) ラズはこのような事態を「競争的（competitive）多元主義」と呼ぶ。Cf. MF, pp. 396-8.

とする。彼らは、その是認と実現が主体の福利を構成するような客観的諸価値を、リスト化して提示する方向へと向かう。たとえば、近年最も包括的な形でリベラル卓越主義の擁護論を展開した論者といえるアレクサンドラ・コートは、そうした客観的価値とは「共感、理性的活動、知識、理解、創作、物理的（肉体的）スキル、深い個人的関係、美への気づき、快楽、苦痛の不在、自律、芸術的技術的創造性、人間の状況（ないし知恵）への気づき、自然への気づき」であるとする¹⁵⁾。その上で、国家は、こうした客観的価値を帯びた個人の諸活動をよりよく促進するため、さまざまな積極的政策を推進することが道徳的に許容される、と主張するのである。たとえば彼女は、自らの生についての責任の貫徹が自律という内在的価値の構成要素であると述べ、その観点から、個人が所与運（brute luck）の悪影響から免れて自らの生をコントロールできるための社会的経済的条件の整備が要請される、とする¹⁶⁾。そしてこのような社会的経済的条件整備の一環として、コートは十分性主義的な分配を正当化しようとしている¹⁷⁾。

15) Cf. Couto 2014, p. 44.

16) コートの分配的正義については、Couto 2014, Ch. 6を参照。

17) コートの卓越主義的分配論は成功しているかどうかはともかく、興味深いものではあるので、ここでもう少し詳述しておこう。所与運の悪影響への是正を分配的正義の中心的考慮におくのは、言うまでもなく運平等主義（luck egalitarianism）であるが、コートは運平等主義よりもリベラル卓越主義の方が、より直観適合的な分配理論を提示できると主張する。運平等主義は、所与運によって引き起こされ、したがって当該個人の責任ではない財の不平等のみを不公正（unfair）だとみなし、それに対する事後的な補償を、典型的には資源の再分配という形で要請する。だが、第1になぜ責任なき財の相対的不平等だけが不公正なのかが謎である。たとえば、財の保有状況が等しい2人の個人について、一方は自らの財の保有状況に責任があり、もう一方は単なる所与運の好影響（brute good luck）によってその財を手に入れたのだとしよう。このとき運平等主義はこの2人の状況には不公正は存在しないと判断するだろうが、これは反直観的だとコートは言う。自律の構成的要素としての個人の責任の促進という観点を採れば、この反直観的帰結を避けることができるとコートは考える。彼女に言わせればむしろ、個人の責任を負わせ

このように、リスト化戦略はリベラル卓越主義の積極的含意を展開する際の強力な梃子になる。しかしながら、こうしたリスト化戦略は、夙に指摘されているように、明らかに難易度の高い戦略である。リスト化戦略の典型であるコートの議論に即して、この点を確認しよう。

第1に、コートのリストアップした諸価値はいずれも極めて抽象的である。したがって、実際の特定の人間活動がなんらかの内在的価値の実現なのか、そうだとはいずれの価値の実現に当たるのかは、論争的でありうる。たとえば選択の責任を貫徹するような生が、常に自律という客観的価値の実現にあたるのかは、議論の余地があるだろう。あるいは、そうした生が常に自律の実現に寄与するとしても、それらは別の価値の実現を阻害する（たとえば共感や深い個人的関係の実現を阻む）かもしれないし、別な反価値を帯びるかもしれない。そうであるならば、彼女の卓越主義的分配論の理論的基礎もその分だけ揺らいでしまうことになるだろう。

第2に、より明白、かつ重要な問題として、こうした諸価値のリスト自体が論争的である。他ならぬコート自身が指摘しているように、リスト化戦略を採るリベラル卓越主義者の間でも、何がそのリストに載るべきなのかについての意見は異なっている¹⁸⁾。だがリスト化論者たちは、自身のリストを正当化するた

る条件を促進することが、運平等主義的な直観の背後にあるコミットメントなのである。したがって所与運の悪影響のみならず好影響による財の保有も、自らの生に対する個人の責任を蝕む限りにおいて、実はその生を改悪していることになる。第2に、運平等主義は事後的な（金銭的）補償のみを考えている、すくなくともそれを不正義への主要な対応だと考えているとしばしば批判されるが、リベラル卓越主義的分配原理はこの点を解決できる。責任ある生の促進が分配的正義にとっての主要な目標であるとすれば、第1に要請されるべきは、事前の社会的経済的状況の整備であり、事後的補償は正義にとって補助的な役割にとどまることになるのである。事後的な金銭による再分配のみを関心事としているとして運平等主義を批判するにおいて、コートは最近の關係的平等論の論者と歩調を同じくしている。

18) たとえばシャーのリストはコートのそれとは異なっている。Cf. Sher 1997.

めの論証と言えるような議論をほとんど提示していない¹⁹⁾。大抵の場合、彼らはただ、自身の客観的価値のリストが直観適合的であることを標榜するだけである。だが、リベラル卓越主義者の間ですら対立が存在している中で、どうして直観のみに依拠して自らのリストの妥当性を明かし立て得ると考えてよいのか、やはり理解し難い。上記のコートの分配論の記述から明らかなように、何が客観的価値かがリベラル卓越主義の実践的含意にストレートに影響することを考えるならば、客観的価値のリストの正当化には重い举证責任が伴単なる直観適合性の主張以上の論証が必要であると言うべきであるだろう。

この点、コートは、リスト上のアイテムが客観的価値である所以についての統一的説明（unifying account）を与える必要はないと反論する。彼女に言わせれば、そもそもそうした統一的説明の不在は理論構築にとって致命的な弱点とはならない。というのも、そのような統一的説明が可能だとしても、それは抽象的すぎて客観的価値をめぐる意見の相違の解消には役に立たないし、そのような統一的説明は、客観的リストに反対する者を説得する役には立たないであろうからである、と²⁰⁾。だが、内的異論の解消可能性や敵対的論者の説得可能性についての現実的見込みの程度は、ある論点が理論構築にとって必要か否かとはおよそ無関連である。むしろ素直に考えれば、内的異論や敵対的立場の存在はある論点についての自己の立場の論争性を意味し、したがって、それについての論証の必要性を示すものであるはずであろう。コートの弁明は悪質な開き直りに過ぎない。

19) 例外は、一定の人間本性論に訴えて卓越さるべき諸価値を同定するタイプの論者である。たとえばハーカのようにこうした議論を現代でも採ろうとするものがないわけではない（Cf. Hurka 1993）。だが、本稿では詳述する余裕がないものの、卓越的人間本性論は明らかに維持し難い。のみならずハーカ自身もその後この立場を捨てて、客観的リスト説に回帰している。

20) Cf. Couto 2014, pp. 54-60.

第3節：ラズの形式化戦略

確認しよう。リベラル卓越主義の展開のためには、何が客観的価値であるのかを提示・正当化する必要があるように思われる。だが、その作業は明らかに困難であり、リストの直観適合性だけを主張して事足りりとするリスト化戦略はこうした作業を完遂できていないようにみえるのであった。そうだとすれば、ここですでにリベラル卓越主義は明白に行き詰まっているようにみえる。

ラズの議論の巧みなところのひとつは、こうしたリスト化の作業をまるごと回避している点にあると評価できよう²¹⁾。彼もまた、第2節(1)で整理したような福利の客観説的諸前提を支持するのだが、彼は客観的に良き生を構成する価値の具体的内容を特定・正当化する代わりに、そうした客観的に良き生が持つ形式的な特徴を描き出し、そうした形式的特徴を梃子にして、リベラルかつ卓越主義的な規範的含意を導出しようとしている。以下では、リスト化戦略を放棄し、ラズの形式化戦略をリベラル卓越主義の「最善の構想」とみなして、こちらに検討の焦点を合わせていこう。

(1) 良き生の形式的特徴：価値の社会依存性と個人的自律

ラズは、福利は主として主体が抱く価値ある目標 (valuable goals) の達成

21) ジェレミー・ウォルドロンも、ラズが実質的な価値の内容についてほとんど何も議論を展開していない点を彼の議論の特徴として指摘している (Waldron 1989: 1130)。ステイブン・レッチェが言うとおり、これは意図的な議論戦略だと理解すべきだろう (Lecce 2008: 99)

に存すると考える（福利の目標達成説）²²⁾。こうした目標の担う価値は客観的である点で、ラズはここまでのリスト化戦略と軌を一にしている。だが、すでに述べたように、彼はこうした価値の具体的内容の解明には向かわず、客観的価値と福利の形式的特徴を描き出すことに注力するのである。

第1に彼が強調するのは、そうした価値ある目標の社会实践との依存関係である²³⁾。ラズにとって主体が構想し達成しようとするさまざまな目標の価値は、プラトンの非自然的実在ではない。目標の価値は、それが創造され維持されているという社会实践の存在から説明される。ただしこれは「目標は社会的に是認されることによって価値を持つ」というある種の規約主義ではない。ある社会实践が創始され維持されるまさにそのことが、価値を創造し、維持するのだとラズは言う（価値創造的实践）。彼のよく用いる例は、さまざまなゲームや芸術様式である。チェスが歴史上のある時点で生まれそれ以降チェスが存在し続けるのと同様、チェスが担う価値も、その時点において新しくその社会に創造され、チェスの実践が維持されることでその価値は社会に存在し続けるのである²⁴⁾。

22) Cf. MF, p.194, p.294, *et. passim*. 「主として」という限定を付しているのは、ラズにとって、目標達成は福利の唯一の構成要素ではないからである。彼は、「生物学的ニーズ (the biological needs)」も、各人が抱く目標の達成とは区別された、福利の構成要素であるとする (cf. MF, p. 290, p. 292)。たとえば適切な気温や十分な栄養などがこれにあたるが、これらは主体がそれを欲求しない場合にも（どころか、主体がそれらに否定的な態度を抱いている場合も）福利を向上させる（ラズによれば）ため、目標達成とは区別される。またラズは福利の概念と「自己利益 (self-interest)」をも区分し、かつ道徳的観点からも賢慮的観点からも「主として」問題になるのは自己利益ではなく福利の方だとしている。この区分にはやや曖昧なところがあるが、その細部にはここでは立入らない (cf. MF, pp. 295-300, この区分に対する批判として Crisp1997, pp. 500-1.)。

23) Cf. Raz 2000, ch. 6.

24) ラズがこのような主張を正当化する際の主要な論拠の一つは、チェスのような社会实践の担う価値に関するプラトニズム的説明が馬鹿げており、それを避けるためにはこのよ

わたしたちが構想し達成しようとする目標の価値に関する以上のような説明は、既存の社会実践が価値ある目標の存在に先行していなければならないことを含意する。さらにラズは、福利を向上させる価値ある（包括的）目標を構想することも、社会に広まっている既存の行動様式とそれに付随するイメージ——これを彼は「社会形式（social form）」と呼んでいる——に基づかざるを得ないのだと主張する（社会形式テーゼ）。このような社会形式に依拠してはじめて、わたしたちは包括的目標を選択することができる、というのだ。どういうことか。結婚の例を考えよう。結婚するとはどういうことか、結婚するとは相手といかなる関係を結び、いかなる社会的取り扱いを受けることを意味するのか。これらは当該社会において積み重ねられてきた実践によって明示的に、あるいは暗黙裏に規定されている。ある相手と結婚することを目標として抱くことは、既に社会に存在しているこれらの関係性や意味や期待の総体を参照すること無しにはなされ得ない。このことは、個人が新規に独創的な目標を設定することが不可能であることを意味しない。ただし、それらの新しい目標も既存の社会形式への参照を必要とするのである。たとえば独自に「新しい」婚姻の形態を目標とする場合も、それは結局のところ既存の婚姻からの変更や、その他の人間関係との組み合わせによって思い描かれる他ないだろう。したがって既存の社会実践の存在は福利にとって非常に重要になるのである²⁵⁾。

個人的自律の位置付け

加えてラズは、福利と個人的自律（personal autonomy）との間の緊密な

うな説明が必要となるというものである。しかし、それがどれほどレバンスをもっているのかは疑わしい。第1におそらく代替的説明として可能なのはラズの価値論だけではないだろうし、第2にラズの立場がプラトニズムよりも形而上学的にミステリアスでないのかもはっきりしない。同様の指摘として、McCabe 2010, p. 65 も参照せよ。

25) MF, p.307-13, また ch. 8。念のため付け加えておくと、本文の記述からも分かるように、これは社会的に承認された活動のみが価値を持つことを意味するのではない。

連関を強調する。すなわち、彼によれば、個人的自律は福利の「構成的要素（constitutive aspect）」であり、「自律無くしては栄える（prosper）ことは不可能である」。ただしすぐ後で見えるようにラズがいかなる理路から個人的自律の価値を導出しているのかについては不透明な部分がある。そこでその点については後で改めて検討の俎上に載せることとし、ここではさしあたり、個人的自律は福利にとって不可欠の必要条件であるとラズが考えていることだけを確認しておこう。

福利にとって個人的自律が不可欠の必要条件であるとして、ではその個人的自律とはいかなる内容を持つものなのか。個人的自律は多義的に用いられる概念である。ある生が一定の特徴を備えていることを指すこともあれば、生が一定の特徴を備えているために必要な主体の一定の諸能力のことを指す場合もあり、両者はしばしば混線する。そこでラズにおけるそれを見る際に、ラズ自身は用いていない用語ではあるが、[行使としての個人的自律]と[前提条件としての個人的自律]という語を使うことにしよう²⁶⁾。

ラズによれば個人的自律の根本的理念は、約言すれば、「価値ある生き方の十分に多様な選択肢を背景に、そこから自らの生き方を独立して選び出し、それに従って生きる」、「自己を創造（creation）する」ことに存する²⁷⁾。したがって、ラズにおける個人的自律は第一義には[行使としての個人的自律]にある。これは次のような内容を持つものとして定義できる。

- [行使としての個人的自律] = df. (1) 生き方の選択に必要な一定の能力を備えた主体が、
(2) 強制やマニピュレーションを受けることなく、

26) Cf. MF, p. 372.

27) *Ibid.*

- (3) 意味ある仕方で異なった十分な価値ある選択肢から、価値ある目標を選び取って生きること

そして、この「行使としての個人的自律」が可能となるための諸条件が二義的な意味での個人的自律である。こちらを「前提条件としての個人的自律」と呼んでおこう。それは「行使としての個人的自律」の内容からほぼ明らかであるが、次のようなものである。

「前提条件としての個人的自律」= df. 主体Sにとって以下の条件が満たされている

- (1) 生き方の選択に必要な一定の諸能力の存在
- (2) 強制やマニピュレーションの不在
- (3) 意味ある仕方で異なった十分な価値ある選択肢の存在

個人的自律の理念にとってこれらの条件が必要なのは、直観的には妥当に思われよう。自律的な生き方が可能であるためには、まず生き方についての十分に多様な選択肢が存在していなければならない。どれも似たり寄ったりでトリヴィアルな違いしか存在しないようであっては実質的に一つの生き方の選択肢しか存在していないのと同じだろう。また、一つの価値ある生き方の選択肢の他は無価値な選択肢しか存在しないような場合にも自律的生は不可能だろう²⁸⁾。自律的生の前提となる多様性は、価値ある生き方の多様性でなくてはならないのである。

28) つまり個人的自律は価値を目指しているものでなければならない。言い換えれば、価値あるものか無価値なものかの選択はそもそも自律的選択の名に値しないのである。

第 2 に、自らの生き方を構想し選び取る際、主体の選択が外的な強制や操作によって歪められているような場合にも自律的生は達成されないだろう²⁹⁾。強制は主体の意思に反した生き方を強いることによって個人的自律を破壊する。また、操作も選択それ自体には干渉していないとは言えるものの、目標を抱いたり決定に到達する過程を歪めてしまうから自律的な生を阻害してしまうとされる。さらに、そもそもそれらの生き方を構想し、選択できなければいけないのだから、そのために必要な一定の自己意識や道具の合理性も必要となるだろう³⁰⁾。

ここで重要なのは、このような個人的自律が、たとえばコートの擁護するような客観的価値のひとつではないことである。個人的自律は諸個人が是認し、目標として構想すべき対象ではなく、生き方の副詞の様態である。したがって、生が自律的であることは、それ自体として諸個人が是認し追求することがなくとも、福利にとっての不可欠な要素なのである。

(3) 自由の領域確保と良き生に対する中立性の弁証

個人の福利についての以上のような形式的特徴をひとまず受け入れるとしよう。こうした福利を政府は促進し保護する義務があるとラズは言う³¹⁾。この

29) 言い換えれば、ここでは他人の意思からの独立 (independence) がまずもって必要とされているのであるが、ここには単なる脅迫や強制のみならず、たとえば貧困などによって自己の生存以外の関心事を持たないような情況に置かれることも含まれるとされる。なぜなら彼の意思決定は、自己保存の必要性に支配されてしまっているからである。Cf. MF, p. 376, ch. 6.

30) Cf. MF, pp. 372-3.

31) 個人の福利を向上させる義務が国家にある、というのは一見すると自然な想定に思われるが、実際には論争的な前提である。ラズにおいてこのような想定は彼の権威の奉仕構想 (service conception of authority) から導かれている。したがって権威の奉仕構想の成否はラズのリベラル卓越主義の成否にもレレパンスを持つのだが、本稿ではこの論点

主張もひとまず受け入れておくことにしよう。だが、この福利の構想から、いかにして自由へのコミットメントが達成されるのか。

ラズのポイントは次の点にある。他者の福利を向上させ保護しなければならないとしても、わたしたちは他者の福利を直接向上させることはできない。なぜなら、目標追求は自律的になされなければならないからである。法哲学の講義を行うことが（仮に）価値ある目標であるとしても、わたしに強制的に法哲学の講義を行わせることでわたしの福利を向上させることはできない。法哲学の講義の遂行がわたしの福利に寄与するためには、あくまでそれが自律的に追求されなければならないからである。だが、自ら構想し選択しそれを追求することこそが個人的自律なのであるから、わたしたちは他者を直接自律的にすることはできない。可能なのは、個人的自律の背景的条件を維持促進することだけである。したがって、統治者が為すべきは、これらの条件を整備促進することにある³²⁾。整理しておくならば、

- (1) 統治者には各人の福利を促進・保護する義務がある。
- (2) 福利にとって〔行使としての個人的自律〕は不可欠の必要条件である。
- (3) したがって、(1) は〔行使としての個人的自律〕を各人に対して促進・保護する義務を含意する。
- (4) ところが〔行使としての個人的自律〕は他者が促進・保護することはその本性上不可能である。他者に可能なのは〔前提条件としての個人的自律〕を促進・保護することだけである。
- (5) よって (1) の存在は、統治者が〔前提条件としての自律〕を各人に対

を展開することはできない。ラズの権威論への反論からリベラル卓越主義を批判する議論として、Quong 2010, ch.4 を見よ。それに対するリベラル卓越主義からの応答として、Chan 2012 を参照。

32) Cf. Waldron 1989, p.1120.

して促進・保護する義務のあることを含意する。

したがって「前提条件としての個人的自律」の内容に対応した国家の義務がそれぞれ導出され、それらは広汎な自由の存在を含意することになる。まず、強制や社会的教化（indoctrination）を通じて特定の目標追求を主体に強いることは「前提条件としての個人的自律」を損ない、よって福利を損なう。したがって主体には目標追求に関する広汎な自由の領域が確保されていなければならないのである。強制や操作を用いることが許されるのは、他者や当人の「前提条件としての個人的自律」を保護するために必要である限りにおいてである³³⁾。また「前提条件としての個人的自律」には、主体の一定の能力の具備が含まれる。したがって、一定の認知的、身体的能力を主体が備えることを助ける様々な積極的施策もまた個人的自律の福利にとっての価値から要請される。

さらに、「前提条件としての個人的自律」は意味ある仕方で異なった十分な価値ある選択肢の存在を要請していた。したがって、十分な生き方の選択肢の確保もまた政府の義務として要請されることになる³⁴⁾。一見するところ、この義務の意義は少ないように思える。政府が要請されているのは、十分に異なった価値ある選択肢の確保であって、特定の生き方の選択肢を保護しなければならないわけではない。あるアイスクリームを買うという選択肢を主体に与えないようにしたからといって、当該主体の自律が奪われるわけではない。したがって、政府は自由にある生き方の選択肢をより良い別の生き方の選択肢と置き換えたりすることが許容されるように思われる。しかし、先述した目標の社会依存性と、価値の多元性を前提にするならば、ひとびとが実際に実践し遂行している異なる生き方の選択肢について、それらが価値あるものである限りは、ど

33) これは危害原理（harm principle）の再解釈であるとされる。

34) cf. MF, p. 408.

ちらが「より良い」とか「より価値がない」とか言うことはそもそもできない。したがって、そうした判断に依拠した政策はそもそも正当化できないのである。

このことは、しばしばリベラリズムの中心的特徴のひとつと目されるところの諸個人の良き生の構想に対する中立性を、リベラル卓越主義も限定的な形で承認できるということを意味している³⁵⁾。すなわち、可能な複数の良き生同士が相互に比較不能ないし通約不可能であるならば、それらの間に内在的優劣を付すことは原理上恣意的 (arbitrary) である。そして、そうであるならば、国家がそうした内在的優劣を根拠にして、一定の生を優遇することは恣意的差別であり、正当化できない。のみならず場合によっては、それと競合する異なった価値の追求者の自尊 (self-worth) を毀損するような意味を表出 (express) する点で不適切である、とりベラル卓越主義の枠組みからも言い得るのである³⁶⁾。

第3節：形式化戦略の問題性

以上が、形式化戦略に沿った、ラズのリベラル卓越主義の概要である。形式化戦略は、客観的価値のリスト化戦略の困難を回避しつつ、卓越主義的実践の可能性とリベラルな自由の擁護を巧みに調和させているように見える。このような形式化戦略の問題として、以下では2点を指摘したい。

(1) 個人的自律の不安定な地位

ラズの議論は、卓越主義とリベラルな自由の擁護を巧みに調和させている。

35) Cf. Wall 2010. この議論を明示的に採用しているのはウォールだけであるが、他のリベラル卓越主義者も、こうした限定的中立性を支持できるだろう。

36) こうした意味を非中立的な判断が持つかどうかは、当該社会の文脈の細部に依存し、したがって前もって抽象的なレベルで中立性を保つべき局面を列挙することはできない、とウォールは述べている。

その議論の鍵は、〔行使としての個人的自律〕を福利にとって不可欠な必要条件であるとしたことにあった。だが、〔行使としての個人的自律〕の内実と、福利の目標達成説の間にはギャップがあるように思われる。

問題はこうである。ラズは自らが定式化するような個人的自律の構想が福利にとっての必要条件を成すと言う。〔行使としての個人的自律〕は、十分に異なった価値ある選択肢が一定以上存在し、一定の心的能力を備えたわたしたちが強制や操作といった阻害要因なしに、そこからある目標を選択し追求することにあるのであった。しかし目標達成説を採用するならば、このような〔行使としての個人的自律〕の存在は福利にとって必ずしも必要ではないように見える。目標達成説は、福利は価値ある目標に対して主体が肯定的評価を抱き、それを実際に達成することに存すると主張するのだった。そうだとすれば、福利は〔行使としての個人的自律〕なしに向上しうるように思われる。たとえば社会にたった一つの価値ある目標しか存在しないとして、いまわたしが当該目標に対し肯定的評価を抱きそれを達成するならば、目標達成説はわたしの福利が向上したと考えるだろう。十分に異なった価値ある選択肢の存在は不要に思われる。

〔行使としての個人的自律〕が福利にとっての必要条件であることは、目標達成説からのリベラルな諸自由の擁護論にとって不可欠の前提であるので、この問題は深刻である。しかし、この問題に対してラズがどのように考えているのかはさほど明瞭ではない。少なくとも2つの異なった解釈ができそうである³⁷⁾。

第1に、ラズは現代社会の偶有的条件に訴える議論を展開している。彼は個人的自律とは現代西洋社会における「生の事実 (a fact of life)」なのだと言う³⁸⁾。どういうことか。彼によれば、現代西洋社会とは多様性の増大と絶え間ない変化の社会である。人々の文化的、道徳的価値観は分裂、変容し、日々

37) このようなラズのアンビバレンスを指摘するものとして、Regan 1989, McCabe 2001 を見よ。

38) cf. MF, p.381.

多様性を増大させていく。また、諸個人の目標追求を可能とする技術的、経済的、社会的諸条件も絶え間なく変化するこのような社会にあっては「自律的に生きる以外の選択肢はない」。個人的自律は、このような条件下において、福利を達成するための必要条件となるのである。

このような社会の多様性と個人的自律の価値との関係を理解するには、資源の希少性と正義の価値との関係との類比を持ち出すのが分かりやすい³⁹⁾。資源の希少性がなければそもそも正義を考慮する必要はなく、財の希少性を前にしてはじめて正義が重要となる。同様に、目標の多様性とそれを達成する手段の変化を前提としてはじめて個人的自律が価値を持つのである。

だがまず、この類比が妥当だとしても、ある条件下において個人的自律が（万人にとって）価値を持つということからは、当該条件を維持ないし存続させるべきだという結論は出てこない。財の希少性という条件下において正義が価値であることは、正義を価値たらしめている財の希少性自体が望ましく、それを促進したり持続させたりすべきだということを含意しない⁴⁰⁾。そうだとすれば同様に、個人的自律のこのような意味での重要性は、社会の多様性自体を促進、持続させるべきだということを意味しないのではないか。財の希少性が解消不可能な「生の事実」であるのと同じく、社会の多様性もまた解消不可能であるというのがラズの認識であるのかもしれない。だがまず、ある事態が解消不可能であるという主張とそのような事態を促進ないし持続させるべきだという主張とは論理的に別個である。かつ、財の希少性とは異なり、個人的自律の価値的背景たるこのような「自律の情況」は少なくとも縮減ないし緩和することが可能な社会的事実であるように思われる。

さらに、ラズの言うような現代西洋社会の偶有的条件からは、〔行使として

39) この対比については Waldron 1989 を参照。次段階における「自律の情況」というフレーズもウォルドロンのものである。

40) Cf. Waldron 1989, p. 1122, Clarke 2012, p. 59.

の個人的自律] が良き生にとって論理的に必要な不可欠であるという帰結は出てこない。言えるのはせいぜい、価値観や目標を達成する手段が極めて多様でありかつ変容し易いこのような条件下においては、主体自身に自らの生き方の決定権を委ねた方が主体の福利が向上する可能性は高い、という経験的な主張だけである。そして、この経験的な主張が正しいかは、少なくとも疑いの余地があるだろう。現代社会の偶有的条件からの議論はラズ的な意味での個人的自律と福利の間のギャップを埋めてはくれないように思われる⁴¹⁾。

もう一つの、より有望な筋道は次のようなものだろう⁴²⁾。すなわち、このようなギャップが存在しているように見えるのは、わたしたちが目標達成説を不十分にしか定式化していなかったからである。ラズの目標達成説は、価値ある目標に対してわたしたちが肯定的態度を抱きそれを達成することに福利が存すると主張していた。ここでラズが考えている肯定的態度とは、単なる欲求や快楽などではない。目標達成説において必要とされる肯定的態度とは、目標の持つ内在的価値を見出すことなのである。福利は、価値ある目標に対して、その目標の内在的価値を把握し、その内在的価値を理由として当該目標を追求し

41) 現代社会の偶有的条件からの個人的自律の擁護については違った解釈をする論者もいる (cf. Clarke 2012)。すなわち、社会形式テーゼからすれば、福利を構成する価値ある目標は既存の社会实践によって規定される。現代西洋社会の特徴とは、価値ある目標の変質にある。現代西洋社会においては、自由に選び取られることが価値ある目標のそもそもの構成要素をなしている。よって、価値ある目標を達成するにはそれを自由に選ぶとすることが必要であり、したがって福利を達成するには「行使としての個人的自律」が必要となるのだ、と。だが、この解釈の下でも、「行使としての個人的自律」が維持・存続されるべき価値であることにはならない。また、この指摘は現代西洋社会の特質の指摘としては明らかに誇張であるように思われる。結婚することや職業選択は、現代西洋社会においてはたしかに自由に選択されるべきものだとされ、概ねそのような実践が存在している。しかし、他の様々な職業から自由に選び取られることが弁護士になるという目標そのものの構成要素だと言えるだろうか。少なくともわたしはそうは思えない。

42) この解釈はスティープン・レセに拠る。Cf. Lecce2008.

それを達成することにこそ存するのである。

この解釈は、目標追求に対するわたしたちの一般的な思考様式と親和性を持つ。わたしたちは目標を抱くとき、それらが自分たちの欲求や選択とは独立に価値を持つと考えて目標を抱き、追求する。わたしは自分がそうしたいという欲求を持つから法哲学の論文を書くことに価値があると考えたのではないし、わたしがそれを選択したから法哲学の論文を書くことに価値があると考えたでもない。むしろわたしは法哲学の論文を書くことが果たして欲求するに値するか、選ぶに値する価値があるのかと考えるのだ。

このような理解をラズは少なくとも明確な形で提示してはいない。しかし、これは最善の解釈であると言えるだろう。目標達成説のこのような再解釈にしたがえば、主体の側の一定の能動的な価値評価と選択はまさに福利の達成と不即不離の関係に立つことになる。わたしがなんとなく何も考えずに法哲学者になることを選び法哲学の論文を書くことを達成したとしても（そんなことがあり得るとしてだが）、わたしは法哲学の論文を書くことの内在的価値に対して応答したわけではないのだから、わたしの福利が向上したことにはならない。また、わたしが強制されて無理矢理法哲学の論文を書きあげたとしても、わたしは法哲学の論文を書くことの内在的価値を見出しているわけではないので、わたしの福利は向上したことにはならない。この意味で個人的自律は福利の必要条件であるとラズは考えているのではないか？

この解釈は社会の偶有的条件に訴える議論よりも優れている。だが、依然として問題がある。まず、この解釈は個人的自律が現代西洋社会に特有の価値であるというラズ自身の認識には反している。そして何より、この解釈に訴えても、福利にとって必要条件となるのはラズが主張するような「行使としての個人的自律」ではない。わたしたちが目標の価値を把握する心的能力が備わっていて、それを行使して目標の価値を把握し、それを根拠として目標を追求することは必要となる。だが、わたしたちが価値を見出す目標自体が、多様に存在していることは必要ではない。再解釈された目標達成説の下でも、ある目標が

複数の異なった選択肢の中から選び取られるのか、たった一つの選択肢から選ばれられるのかは福利の向上にとってイレバントである。

さらにこの解釈は別の重大な問題を孕む。このような目標の内在的価値の把握としての個人自律は、強制を含むさまざまなパターナリスティックな介入に対して抵抗しえないのである。たとえばモデルを使った公共広告などを通じて、政策決定者が良き生であると考えるところの目標 X に対する選好を獲得させようとするでしょう。このとき主体は、目標 X に対する選好を獲得しているが、その生き方の価値を把握しているわけではないでしょう。これは先の分析からすれば個人的自律の行使たる要件を欠いており、したがって主体の福利を向上させないように思われる。しかし、その後、当該主体が目標 X の持つ価値を正しく認識し、それを理由として目標 X を追求し続けるとしたらどうだろうか。たしかに最初の選択は自律的ではなかったかもしれないが、その後の継続的選択は自律的である。そうだとすると、全体としてみたとき、この介入は当人の生を改善すると言えるだろう。

このような可能性は、強制であれ操作であれ課税であれ排除できない。それらのやり方においていずれも主体は、選択肢の内在的価値に応答しているのではないがゆえに、自律的選択を行っていることにはならない。しかしいずれも当初の非自律性にもかかわらず、そのことは事後的に主体が事物の正しい価値を認識し、事物に対する正しい価値認識に従って目標を追求する可能性があることを妨げない。したがって、国家が行う介入の非自律性はさほど問題にならないのである。これは日常生活でもよくある現象であるように思われる。法哲学という科目の名前の響きがかっこいいから法哲学を専攻すると決意した時、わたしは法哲学の価値についてなんら正しく認識していない。だがわたしは法哲学を学ぶにつれて名前のかっこよさに惹かれたことは忘れ、法哲学の内在的価値を認識し、それを理由に法哲学を専攻するようになるかもしれない。価値把握能力の行使としての個人的自律は、事後的（ex post）な自律の回復によって当初の個人的自律の毀損が治癒される可能性に対し、抵抗する資源を持たな

いのである。

(2) 無価値な生き方の排除をめぐる問題

第2に、ラズの形式化戦略は無価値な生き方の扱いをめぐって問題を抱えるように思われる。リベラル卓越主義が肯定する卓越主義的諸施策は、単に価値ある生き方を促進するために、それを可能にするような諸活動を助成することにとどまらない。彼らが前提する客観主義的福利論は、個人が欲求し選択する生き方が無価値であり、したがって福利を向上させない可能性を認める。したがって、国家にはそうした無価値な選択を禁じることが—少なくとも一定の場合には—許されるということになるのではないだろうか。形式化戦略においても、[前提条件としての自律]が求めているのはあくまで十分に異なった価値ある選択肢の確保にとどまる。したがって、無価値な選択肢までを国家が保護すべきことを意味しない。実際ラズは、「自律の原理は、…厭わしいものを根絶することを許容し、要請しさえする」と述べる⁴³⁾。

これは目標達成説から[行使としての個人的自律]の価値を導出したことの必然的な帰結である。なぜならば、目標達成説が福利を価値ある目標の達成に存すると考える以上、無価値な目標を選び取りそれを行行使することは福利を向上させないからである。それどころか、ラズ自身は、自律的に無価値な生き方を選択することは非自律的に無価値な生き方を選択する場合よりも深刻に福利を改悪するとさえ考える⁴⁴⁾。したがって、「自律の原理は、政府に価値がある選択肢を創造し、厭わしいものを根絶することを許容し、要請しさえする」とラズは明言するのである⁴⁵⁾。

だが、多くの人はこの結論に懸念を覚えるだろう。このラズの推論に従えば、

43) Cf. MF, p. 417.

44) Cf. MF, p. 379-80.

45) Cf. MF, p. 417.

政府は自らが無価値と思える生き方を積極的に禁じていくべきだということになるのではないか。

かかる懸念に対してラズは、ある目標追求を制約することが許されるのはあくまでそれが実際に無価値であるような場合に限られるのであり、単に立法者がそれを無価値と考えているだけでは十分ではないとしてかかる憂慮を斥けようとする⁴⁶⁾。しかし、ラズは選択肢がいつ実際に無価値になるのか、それをほとんど述べていない⁴⁷⁾。

一方でラズは実際に無価値な目標追求の禁止が許容される場合を示している。ラズによればそれは、ポリガミーの禁止とモノガミーの強制のように共同体の成員の非常に広汎な支持が得られる場合であるのだという⁴⁸⁾。これはいくつかの問題を惹起する。第1に、モノガミーの意味を非常に薄く解しない限り、この実践に対して「非常に広汎な支持が存在する」とは言えないだろう。そもそも、たとえそのような共同体内部での全会一致の合意があるとしても、それを選択肢が実際に無価値であることの推測根拠にしてよいのだろうか。ある選択肢の無価値さについての共同体の合意は、単なる無関心や錯誤や社会的教化の産物であるかもしれない。ラズはこの点において楽観的に過ぎるように思われる。通常は選択肢の無価値性について社会的に支持がありごく少数者だけが当該選択肢に価値を見出しているからこそ、その選択の自由を多数者の専制から保護すべき立憲主義的理由が存在することになるはずである。しかし、ラズの議論では、社会的合意の存在こそが全面的な卓越主義的介入の根拠を提

46) Cf. MF, p. 412.

47) Cf. Waldron 1989, p. 1130.

48) ただし、正確にどの程度の支持が必要なのかについては「かなりの程度」と述べている場合もあれば、「全会一致の支持」が必要であるとしている場合もあり、ラズの記述には揺れが見られる。ある政治共同体が全会一致で無価値であると認めているような生き方の選択肢など存在しているだろうか。

供することになってしまう⁴⁹⁾。

このような無価値な選択肢に対する制約の原理的正当化可能性に対してラズは、その非実践性を指摘してその非リベラルな匂いを緩和しようとしているが、それは上手く行っているようには見えない。第1に彼は強制的な刑罰は主体の行為可能性を包括的に制約するという特性を持つが故に、無価値な選択肢を選ぶことを主体に禁じるのみならず他の価値ある選択肢を選ぶ可能性をも剥奪し、全体としてみれば主体の価値ある〔前提条件としての個人的自律〕を毀損するのだと指摘する⁵⁰⁾。たとえば懲役刑はたしかに主体が無価値な選択肢を選ぶことを不可能にしてくれる。しかし当然ながら同時に他の価値ある生き方を選択することを不可能にしてしまう。だが、これはさほど強い反論ではない。たしかに懲役刑のような場合にはかかる副次的効果のゆえに強制は却って個人的自律を損なうだろう。しかし、かかる副次的効果はより narrowly tailored な政策によれば除去されるはずである。たとえば、仮にマリファナの使用が無価値な目標であるとして、かかる目標追求を禁じるために、マリファナの単純所持に懲役刑を科したり、クラブの音楽イベントを禁じたりするならば、たしかにそのような副次的効果が生じるだろう。だが、マリファナ自体の生産を禁じたり、マリファナの販売を禁じるならば、そのような副作用は生じない。しかし、関連していくつかの価値ある目標追求が禁じられると反論されるかもしれない。仮にマリファナの販売を禁じるとそれに付随してなにがしかのそれ自体としては価値ある目標追求が困難になるとしよう。しかしそれは個人的自律を損なうことはない。なぜなら、自律的生にとって必要なのは、価値ある目標が十分に残されていることであるからだ。特定の価値ある選択の消滅自体は自律からの反論の根拠にはなりえない。

49) Cf. Lecce 2008, p.121.

50) 同旨の指摘として、Sadurski 1990, p. 133, Lecce 2008, p. 123, Regan 1989, p. 1082 を見よ。

第2に、無価値な選択肢の制約という卓越主義的制約は課税や補助金や広告といった、強制以外の方法によって追求可能であり、これらは個人的自律を損なわないがゆえに問題ではないとラズは言う⁵¹⁾。だが、[行使としての個人的自律]においては操作も禁止されており、その根拠はそれが主体の行為可能性を制約するが故にではなく、主体の意思決定過程を「歪める」点に求められていたことを思い出そう。この点を想起すれば、課税、補助金、広告といった緩和策を許容することは、ラズ自身の[行使としての個人的自律]の枠組に反する⁵²⁾。たとえば狩猟が無価値な行為であるとしよう。狩猟行為を禁じる目的で政府が狩猟行為に対して課税したとしよう。狩猟行為を行うかどうかを考える際に、わたしたちは狩猟行為の内在的価値だけではなく、その機会費用をも勘案しなければならない。つまり課税は主体の意思決定過程に「歪み」を与える。そうだとすれば、このような課税や補助金といった方法もまたラズの言う個人的自律を損なうはずである⁵³⁾。

いくつかの箇所ではラズは、強制によって無価値な選択肢を制約することは「支配／被支配の関係を表す」、そして「強制される個人の尊厳を尊重していない証となる」がゆえに強制は個人的自律を毀損すると述べる。しかし、なぜそれが問題となるのか。無価値な選択肢を選び取るとき、自律は価値を持っていなかったはずである。価値のないものを損なっても問題になるはずがない。これが理解可能となるのは、自律が福利とは無関係な客観的価値を持っている場合に限られる。それがただちに間違っているわけではない。しかし、それは最早ラズの当初の枠組からは逸脱していると言わなければならない。このような応答を追求しようとするならば、なぜ個人的自律が客観的に価値あるものなのか、

51) cf. Raz 1994, p. 337.

52) Cf. Waldron 1989, p. 1188.

53) Cf. MF, pp. 377-8.

こうした議論にラズは立ち戻らなければならないのである。

第4節：結語

たとえばキンバリー・ユラコは、フェミニスト卓越主義を自称し、フェミニズムの主張はリベラルな中立性の原理に基づくよりも、直截に一定の善の内在的価値に基づくことでより良く正当化されると論じている⁵⁴⁾。一例を挙げれば、売買春の禁止は、それが人間のセクシュアリティや自尊という客観的価値を端的に毀損するからだと考えるべきだというのである。この議論が成功しているかどうかは措くとして、ここにはリベラル卓越主義へと人を駆動する動機が端的に表れている。すなわち、主体自身の主観的評価を乗り越えて、人間の一定の選択やその置かれた状況を良きものとして促進し、また悪しきものとみなして排除したいという欲望を抱えつつ、自由にも一定のリップ・サービスを払いたい論者にとって、リベラル卓越主義は最も直接的な理論的表現をあたえてくれるのである。

だが、ここまで論じてきたところからすれば、やはりこの誘惑には乗るべきではない。リベラル卓越主義のストレートな理論的展開であるところのリスト化戦略は、客観的に価値ある生き方・無価値な生き方の論争的性格を無視し、自らの独断的確信に安易にもたれかかっている点で拒絶されるべきものである。この点、ラズの形式化戦略は、この独断の危険性を自覚し、客観的価値と福利の形式的諸特徴のみに禁欲的に依拠しつつ、諸個人の自由と、卓越主義的实践の擁護を達成しようとする点で巧みな戦略であると評価できる。しかし既述のとおり、形式化戦略は、福利の形式的な位置づけを貫徹できていないし、

54) Cf. Yuracko 2003. ただし、そもそもユラコを「リベラル」卓越主義の論者に組み入れてよいかには異論があるかもしれない。彼女へのフェミニズム内部からの説得的な反論として、Schwartzman 2005 を参照。

卓越と自由を適切に両立させることにも失敗している。

結局のところ、自由と卓越の隘路を行こうとするリベラル卓越主義の試みは失敗している。わたしたちは別な道を探さなければならない。

文献一覧

- Couto, A., *Liberal Perfectionism: The Reasons that Goodness Gives*, De Gruyter, 2014.
- Chan, J., 'Legitimacy and Unanimity', *Philosophy and Public Affairs*, 2000.
- Chan, J., 'Political Authority and Perfectionism: A Response to Quong', *Philosophy and Public Issues* (New Series), Vol. 2, No. 1, pp. 31-41, 2012.
- Clarke, S., *Foundations of Freedom: Welfare-Based Arguments Against Paternalism*, Routledge, 2012.
- Crisp, R., 'Raz on Well-being', *Oxford Journal of Legal Studies*, Vol. 17, pp. 499-515, 1997.
- Green, L., 'Un-American Liberalism: Raz's Morality of Freedom', *University of Toronto Law Journal*, Vol. 38, pp. 317-32, 1988.
- Hurka, T., *Perfectionism*, Oxford University Press, 1993.
- Kulenovic, E., 'Defending Perfectionism: Some Comments on Quong's Liberalism without Perfection', *FILOZOFIA DRUSTVO XXV* (1), 2014
- Lecce, S., *Against Perfectionism: Defending Liberal Neutrality*, University of Toronto Press, 2008.
- Lister, A., 'Public Reason and Perfectionism: Comments on Quong's Liberalism Without Perfection', *FILOZOFIA DRUSTVO XXV* (1), pp. 12-34, 2014
- Mang, F. F., 'Liberal Neutrality and Moderate Perfectionism', *Res Publica*, 2013.
- McCabe, D., 'Joseph Raz and the Contextual Argument for Liberal Perfectionism', *Ethics*, Vol. 111, No.3, pp.493-522, 2001.
- McCabe, D., *Modus Vivendi Liberalism*, Cambridge University Press, 2010.
- Mills, C., 'Can Liberal Perfectionism Generate Distinctive Distributive Principles?', *Philosophy and Public Issues*, Vol. 2m No.1, pp. 123-152, 2012.
- Raz, J., *Morality of Freedom*, Oxford Clarendon Press, 1986.
- Raz, J., 'Facing Up: A Reply', *Southern California Law Review*, Vol. 62, pp. 995-1095, 1989.
- Raz, J., *Ethics in the Public Domain*, Oxford University Press, 1994.
- Raz, J., 'Liberty and Trust', in George, P.(ed.), *Natural Law, Liberalism, and Morality*, Oxford Clarendon Press, 1996.
- Raz, J., *Engaging Reason: On the Theory of Value and Action*, Oxford University Press, 2000.
- Regan, D., 'Autonomy and Value: Reflections on Raz's *Morality of Freedom*', *Southern California Law Review*, Vol. 62, pp. 995-1095.
- Sadurski, W., 'Joseph Raz on Liberal Neutrality and the Harm Principle', *Oxford Journal of Legal*

Studies, Vol.10, No.1, pp.122-133

Schwartzman, L. H., 'Neutrality, Choice, and Contexts of Oppression: Examining Feminist Perfectionism', *Social Philosophy Today*, Vol. 21, pp. 193-206, 2005.

Sher, G., *Beyond Neutrality: Perfectionism and Politics*, Cambridge University Press, 1997.

Waldron, J., 'Autonomy and Perfectionism', *Southern California Law Review*, Vol. 62, pp. 1097-1152, 1989.

Wall, S., *Liberalism, Perfectionism, and Restraint*, Cambridge University Press, 1998.

Wall, S., 'Neutralism for Perfectionists: The Case of Restricted State Neutrality', *Ethics*, pp. 232-256, 2010.

Wall, S., 'Perfectionism in Moral and Political Philosophy', *Stanford Encyclopedia of Philosophy*, <http://plato.stanford.edu/entries/perfectionism-moral>, 2012.

Yuracko, K., *Perfectionism and Contemporary Feminist Values*, Indiana University Press, 2003.